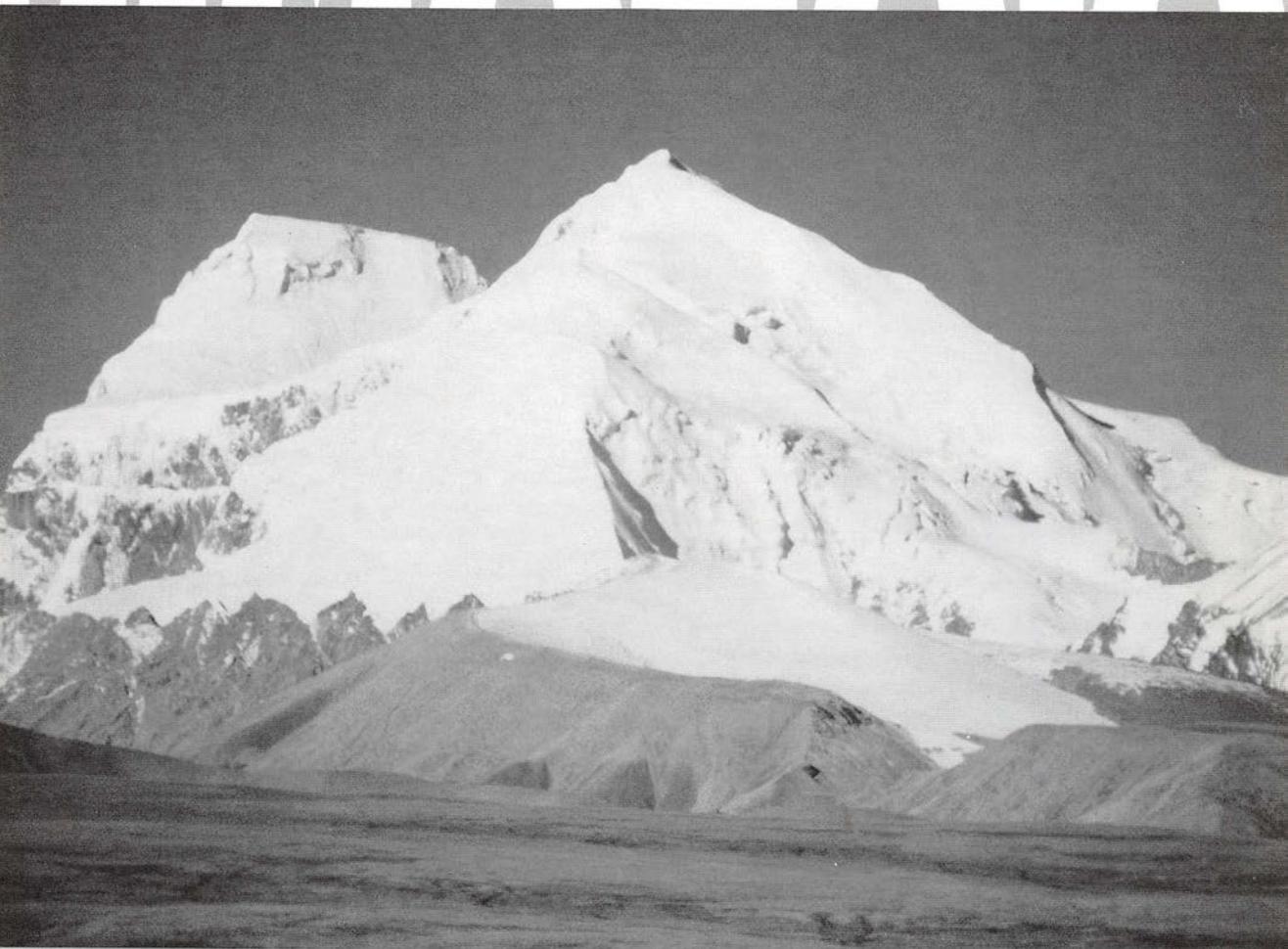


HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 350



2001 JANUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2001年H A J サマー・キャンプ隊員募集

桑頂抗沙峰 (6,590m)

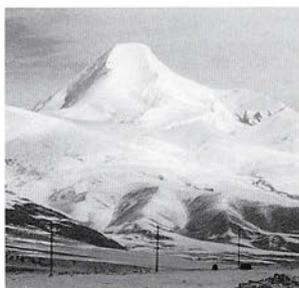
チベットのラサから北北東(直線距離で約135km)に美しい山容の山があります。周囲の山々を睥睨するかのように峻立するその姿は、白い雲にまとわれて見る者は息をのまざるを得ません。

この山は1992年日本隊によって初登頂されていますが、その後登山隊の消息はありません。

そこを舞台にサマー・キャンプを実施します。

記

1. 期間:2001年7月20日～8月16日(28日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:70万円
4. 〆切り:12月末日
5. 資料請求先:
H A J 事務局



カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みにご協力下さい。(日程を変更しました)

記

1. 期間:2001年7月20日(金)～8月31日(月)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:75万円
4. 資格:冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切:12月30日(定員になり次第〆切)
6. その他:H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。

表紙写真

前号で紹介した連山の右側のアップ写真である。二つとも7,000mを超えた美しくも厳しい山々である。いつの日かトライしてみたいものだ。

(記:山森欣一)

ヒマラヤ No.350

1. ターラ・リ (6,777m) に挑む H A Jターラ・リ登山隊
20. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
22. ヒマラヤ登山者アンケート調査結果
24. 寸感・事務局日誌

南チベット未知の山群

ターラ・リ (6,777m) に挑む

H A Jターラ・リ登山隊

〔はじめに〕

ナムチャ・バルワに夢中になっていた1986年秋、中国から「西藏氷川」が刊行された。その中の一枚の小さな写真の中の山に興味を持った。同書には、その山の周辺の氷河の概説と氷河を中心とした、概念図が載っていた。

それによれば、ナムチャ・バルワの南東、梅里雪山の北西にあり、二つの有名な山の中間に位置しており、山の名は「若尼峰（ルオニ）」標高は6,610mであった。多分誰にも知られていない未知の未踏の山群であった。

その頃の私には、南東チベットで足を踏み入れたい場所が二つあった。一つは、「墨脱・メド」でありもう一つが「察隅・ザユー」であった。

墨脱は、グレート・ベントの川下りが実現すれば必ず立ち寄ることが出来る。若尼峰は、察隅の北西至近距離にあった。

低くとも山群の主峰を好む私には、ナムチャ・バルワが終わった後の目標としては格好の舞台であった。翌年早速、察隅経由の登山許可申請書を中国登山協会に提出し、併せて地元チベット登山協会からも良い感触を得ていた。

しかし、ナムチャ・バルワは我々の手には落ちなかった。そのことを切っ掛けに私は暫くチベットを離れ新疆や四川、青海で登山した。

長い時間が過ぎた。95年再びチベットに戻った私は、あらためて中国登山協会に「ルオニ」の登山申請を行い2001年秋の許可を得た。初めの申請から13年が経っていた。

そうした中、このところ東チベットに通い続けている中村保氏が99年5月、若尼峰のBC付近まで足をのばし若尼峰の写真を撮ってきた。それは「西藏氷川」の写真と全く同じものであり、アプ

ローチを中村氏が辿った北面に変更し、写真を眺めながらこの山へあれこれと思いを巡らせていた。

そんなある日、中国登山界と親しい人が隊長を務める他隊が、若尼峰に対して我々より早い時期の登山申請を出したとの情報が入ってきた。既に私にOKを出している中国側の困惑した立場を理解できる私としては、時期を繰り上げて2000年夏に実行することにした。

だが、夢の実現には長い時間と様々な障害に打ち勝つ忍耐が必要だ。若尼峰に出発するばかりとなっていた7月上旬、中国からアプローチ・マーチの中間にある「通麦」付近が大洪水のため道路が決壊し、補修に時間がかかるとのこと。最終決定はラサに到着して行くにしても転進先を検討しなければならぬ。

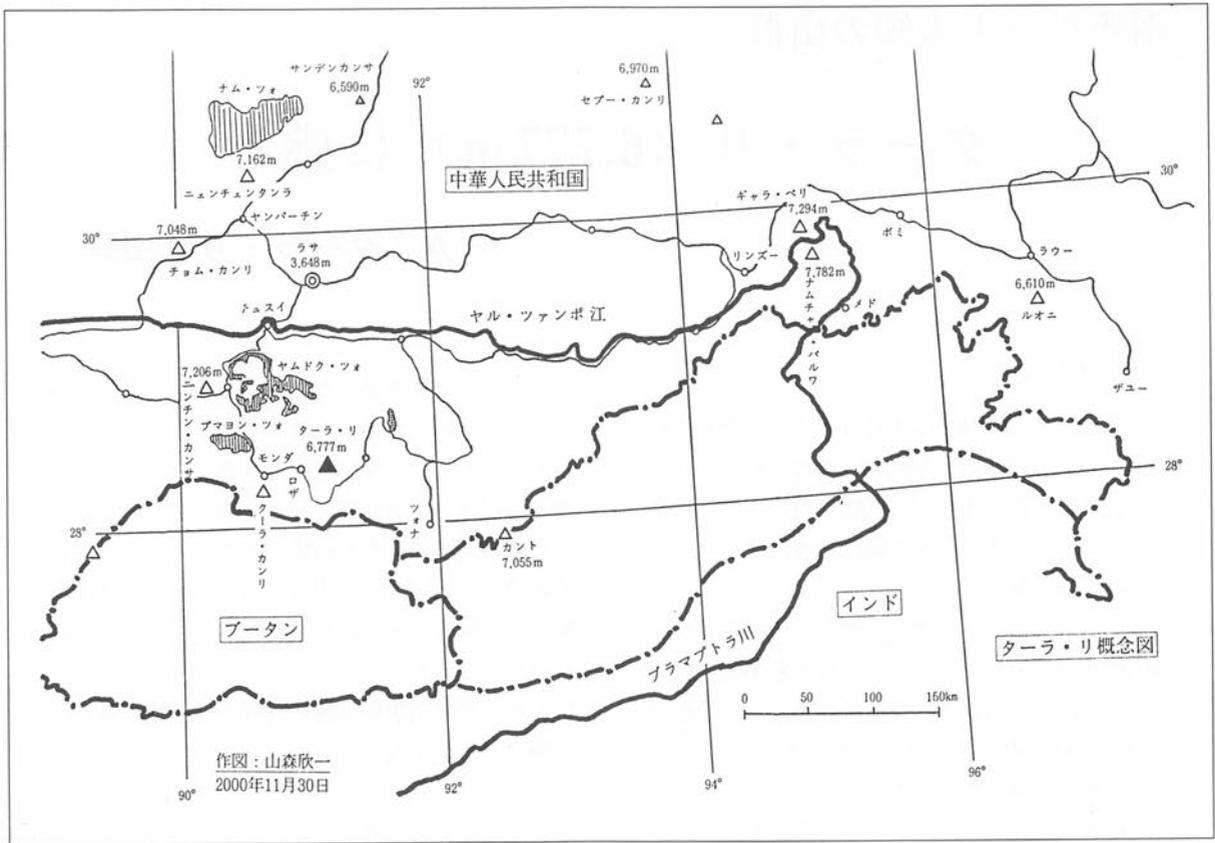
その時、私は躊躇なく転進先を南チベットのロザンにある「打拉日（ターラ・リ）6,777m」に決め隊員の了解を得た。

97年春、私はチベットと合同でクラー・カンリⅡ峰(7,418m)の初登頂を目指した。BCは、流れ下ってブラマプトラとなるロザン・チュー右岸にあるザーりに置いた。BCの対岸の丘に登ると白い連峰が見えた。この山がターラ・リである。地域的にも全くの処女地であり大きな山塊である。98年には登山許可申請を済ませてあった。

7月28日、ルオニ隊の6人が北京に到着すると、ラサに行くまでもなくここでルオニ行きは無理と判明し、登山隊の目標は自動的にターラ・リとなったのである。

そのターラ・リ登山も最終的には、主峰の登頂を断念し、連峰の二つの峰に登頂して終わった。以下にその概要について報告する。

(記：山森 欣一)



行動表	
—————	Aパーティ (野沢井、太田)
-----	Bパーティ (樋上、桐沢、佐藤)
TOP	マイシヤ・カンリ
C 2	
C 1	
B C	
日程	8/7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 9/1 2
備考	タイラリBC入り タイラリBC入り 哲馬真勇BC入り タイラリBC出発 一次アタック マイ・シヤカンリ 二次アタック 荷下げ 下山

〔登山基地、ロザへ〕

7月28日、成田から中国国際航空で北京に入った。ここでルオニ行きを正式に断念し、目標をターラ・リに決めた。翌日成都に一泊し30日ラサに到着。常宿である「ヒマラヤ・ホテル」に泊まる。

8月2日、ラサでの準備を終えて2台のジープとトラックで登山基地のロザ(3,850m)に移動。ロザでは近隣のチベット住民が集まり盛大な祭りの最中であった。3日、私を除く5人は2台のジープでターラ・リの西面を偵察。4日、私と不調の佐藤を除く4人は東面を偵察した。結局、登山期間が多くとれる西面から登山することに決定。

私は日本を出発する前にこじらせた風邪が元で咳や痰が酷く招待所の2階までの階段を登るにも苦しいので暫く入院することにした。病院はあるものの工事中であったが幸いベットが空いていた。14日まで闘病生活を強いられ15日退院した。結局肺水腫の初期症状であった。馬に揺られてゴンジュ部落で一泊し16日チュマチェンヨンのBCに復帰した。(記：山森 欣一)

ターラ・リ偵察

8月3日 曇時々雨

8時、ロザの招待所の窓の外は12℃、薄曇り。近くの食堂の準備が出来るのを待って朝食。10時15分、夜間の咳がひどかった山森隊長を除く5人は、成天亮氏と共に2台のジープに分乗してターラ・リのアプローチ・ルートの偵察に出発する。

10万分の1地図によると、ターラ・リの西6kmにヤユ・ツォという氷河湖があり、氷河がターラ・リ南面直下に続いている。近くにはカルカの記号があるが、ヤユ・ツォから流れ出す川の下流には顕著なゴルジュ帯があって下流からカルカへの道は無く、北隣りのテガ・チュー沿いのテガ部落(4,200m)からダライ・ラ(5,372m)を越える山道等が通じている。ただ、この地図はかなり古く、現在は新しい道が出来ているかも知れない。実際、山森隊長は97年にクーラ・カンリ南面へ入る道の手前でロザション・チュー左岸側に入って行く道路を見たそうである。我々はターラ・リ西面ではヤユ・ツォ付近にBCを設けるのが最適と考え、公路からある程度車が入れて、更には標高差の大

きな山越えをすることなくヤユ・ツォに到達出来るルートを探そうとしているわけである。

ロザの町を出てロザション・チュー右岸の公路を東へ6km程行くと道は二分する。左は橋で対岸へ渡ってメンダン方面へ行く道。我々は右のラカンへの道を進む。古い10万分の1地図には、この道は描かれていない。暫くすると左岸から大きな支流、テガ・チューが合流する。ここにも橋がかかっており対岸に道路が見える。帰りに入ってみる事にして公路を先に進む。このあたり、兩岸百メートル以上に切り立ったゴルジュの底を濁流が流れ、道路は右岸の壁際、水面からわずかに数十cm上に付けられ、今にも冠水しそうである。

まもなく、幅1m程を残して道が流失している箇所につかった。川岸に石を積み重ねて補修してあるが、その石も次々に流されてしまったらしく、そのままでは車が通過出来ない。全員で近くの石を運んで積み重ね、なんとか通れるようにする。更に少し下流に行くと細い橋があり対岸の急斜面にジグザグの山道が見える。地図を見ると、この上にもヤユ・ツォへ通じる峠があるのだが、標高差1,600mの急登は厳し過ぎるのでパス。

公路が左岸に移り道路工事の現場を過ぎると、左からヤユ・ツォを水源とする支流が出合う。その主流の右岸には車道が奥に伸びているのだが、何故か公路からの入口に大量の土を盛って塞いであり進入出来ない。仕方がないので通過する。この先でチャ・シャンへの道に車が入れば、その道の途中から我々の目指す方向へ接近出来るかも知れない。クーラ・カンリ南面への道を分けると、まもなく左岸に急傾斜の細い道が登っており、工事の人に尋ねると、これがチャ・シャンへの道との事。とても車は通れない。

発破作業のため待たされたりしながらヤユ・ツォからの支流出合まで引き返し、支流左岸にも落石だらけの怪しいげな道があるのを見つけて歩いてみるが、300mも行かないうちに道は川の中に消えていた。土盛りで塞がれた右岸の道路を調べていた運転手が、河原の大石の間を縫って道路に乗り入れるのに成功。奥に進む。2km程上流の橋で左岸に渡ると下流方向に進みながら急斜面を登り、どんどん高度が上がる。道は狭く、もうUターン



は不可能。斜面にはまばらな灌木しか無く、転落すれば谷底まで行ってしまふだろう。やがて道は支流の上からロザション・チュー本流の真上に出て、本流をはるか下に見下ろしながら南下する。

14時20分、民家に行き着く。高度計は3,950m。川より500~600m高い。雨が降りだしており家の中に入れてもらう。一室に10人以上が入り、出された茶もそこそこにチベット語、中国語、日本語が乱れ飛ぶ。手描きの略地図を示したりして分った事は、「ここからヤユ・ツォへの道は無い。車はこれ以上進めないが道はチャ・シャンまで続いていて4時間で行ける。チャ・シャンからヤユ・ツォへは1時間。」というものだった。1時間というのは到底信じられない。1日でも無理である。別の氷河湖の事を言っているのに違いない。

今にして思えば、もう少しじっくり話せば我々の目指す氷河湖へのルートについて有益な情報が得られたのかもしれないが、この時はテガ・チュー沿いに車が入れると思いついでいたので早くそちらへ行きたいという気持ちが強く、まもなく民家から引き上げてしまった。

16時頃テガ・チュー出合の橋への分岐まで戻ってくる運転手は、工事の人にでも聞いたのか、車は行けないと言う。これで西面から車でターラ・リに接近出来る道は全く無いことになる。今から歩いて峠道を見てくるのは時間的に無理であり、明日、東面へまわってみることにして帰路につく。

ロザまであと数百メートルという所に丸太を並べた橋が小さな谷川に架けてあるが、私の乗った車が渡り終えようとした時、端の丸太が落ちて右後輪が落輪してしまい動けなくなった。もう1台は後にいるので牽引も出来ず、ロザの方から通り

かかる車を待って引っぱり上げてもらうしか無さそうである。しかし今日1日、対向車は数える程しか無かった事を考えるといつになるか分からず、運転手2人を残して我々は歩いて先に帰らせてもらう。

17時過ぎ招待所に着き山森隊長に報告。隊長は明日の体の具合を見て入院を考えると云う。隊荷を積んで昨日ラサを出た筈のトラックがまだ到着しないのも心配である。

8月4日 曇時々晴

佐藤氏は熱があるため隊長と共に招待所に残り4名と成天亮氏は8時55分、車2台でターラ・リ東面の偵察に出発。

ツォメイの方から流下してラカンでロザション・チューと合流するシャジュ・チューの大きな支流がターラ・リ東面に深く食い込んでおり、この支流沿いには幾つかの集落があって、地図帳の記号欄に「郷村道路」と書かれた道が通じている。この道を車が通行出来ればベスト。歩かなければならないとしても標高差の大きな峠越えをすることなくターラ・リに接近出来る唯一のルートという事になる。歩くとなるとBC適地まで2~3日かかりそうだが。

ロザを出て昨日と同じ道を行くが道路補修工事のため何度も停められ2時間かかって30kmしか進まない。やがて道は右岸高く登り、集落の点在する緩傾斜地を行くようになると次第に植生が豊かになり、松などの樹木やクコのような実の成った灌木も見える。ターラ・リ方向は雲におおわれて見えない。ラカンに近付くと再び谷底まで下りロザション・チューの対岸に移る。橋の上で高度計は今回のチベットでの最低値3,050mを指した。

▼タンパからシャララ・カン (6,682m) 南面



シャジュ・チューとの合流点の下流は樹木が所々に付いた壁が兩岸高く霧の中に切り立ち、紀伊半島の大きな谷に似ていなくもない。合流点の20km程下流はブータン国境である。シャジュ・チューを渡ってラカンへ登って行く。麦畑と広葉樹が多いが人家はまばらである。2～3の分岐を過ぎると家屋も見られなくなってしまい、麦畑で働く人に道を確認する。ツォメイ方面へはこの道で良いようだ。ラカンの中心部を通らず町外れを通過してしまったのかもしれない。シャジュ・チューの川岸に下って暫く続いた道は、支流の橋を過ぎると再び高度を上げ、次の支流との中間尾根を越す峠では3,800mとなる。相変らず山は見えない。ここで運転手2人も車外に出てビスケット等の昼食。

成天亮氏は隊荷を積んだトラックを捜しに行くと言って謝氏運転の車で引き返して行き、我々4人はパサン氏の車で先に進むことになった。14時20分、峠を出発して東から流下する支流沿いに入り、その左岸の山腹を延々と奥まで進んで小さな橋を渡り、今度は右岸の山腹を下流方向に戻る。こうして先程の峠から直線距離2kmの対岸へ出ると走行距離は20km以上、1時間近くかかってしまった。暫くしてターラ・リ東面への入口に当たるタンパという村への分岐点を見過ぎてしまったらしい事に気付き、見晴らしの良い場所に車を停めてもらい下に見える道を確認して引き返す。分岐を見つけて標高差600mの悪路を下り、木の橋でシャジュ・チューを渡って対岸のつづら折の道を登る。この急傾斜のぬかるんだ道を、トラックは登れないとパサン氏は言う。標高差350m登っ

て17時前、やっとタンパの村に到着。傾斜地の所々に樹木に囲まれた家屋が見える。車ではこの村より奥には行けないようである。朝から悪路の運転を続けてきた55歳のパサン氏が、それほど疲れた様子も見せず村人との交渉に当たってくれる。この先、馬の通れる道があり、馬15頭と馬方4人の手配が可能との事。

17時50分、帰途につく。往路で昼食を食べた峠に近付くと、ターラ・リの方向の雲の上に迫力ある山が顔を出した。ターラ・リの手前のシャララ・カン(6,682m)である。車を停めて写真を撮る。その後は検問と小休止のため一度ずつ停車した以外はノンストップで飛ばし、日付の変わる前にロザに帰ることが出来た。トラックも到着している。今日の結果を報告。タンパ村から東面に入る事に決め、空腹のまま1時半就寝。

8月5日 曇一時晴

朝、皆でターラ・リ東面へのアプローチ及び撤収の日程を再検討する。雨期の道路状況等を考慮して日程の余裕を見込むと、登山期間があまりにも短くなってしまおうので、再び西面からの入山を検討。結局、輸送手段が得られるようなら、テガ部落を経由してグライ・ラを越えヤユ・ツォ付近にBC建設、という事になり隊長が成天亮氏に民工(ポーター)等の手配を依頼する。

山森隊長は肺水腫の可能性が強く、招待所の西200mの所にある病院に入院する事になり、私が荷物を少し持ち成天亮氏と3人で病院に向かう。病院の敷地内は一部の建物を取りこわして地面を掘り返す工事の最中であり、まるで廃墟である。一番手前の古い平屋建の入口付近で待つ。工事現



▲タンパの村人に道をたずねる

場の脇に物置きのような建物があり、見ると「手術室」と書いてあった。内部は見えていないが、ここで手術を受けるのは極力避けたいと思ってしまう。30分近く待たされただろう。やっと若いチベット人医師が着て診察が始まった。そのうち更に2人の医師らしい人が加わる。まもなく一室に入院の準備が整えられたが、この病院には酸素設備が無いらしいのが気がかりである。

午後、成天亮氏から嬉しい知らせが入る。公路からヤユ・ツォまでのキャラバンにはドライ・ラ越えを含めて全行程で馬が使え、明後日出発可能。翌日にはヤユ・ツォに着くそうである。馬1頭当り60kg。15頭の手配をお願いする。地図では急峻に見えるドライ・ラを荷物を積んだ馬が越えられるとは思っていなかった。トラックの隊荷を1個30kg程度に再梱包する。夕食後、皆で山森隊長の病室へ行き状況報告。

8月6日 曇のち雨

5人で病院に立ち寄った後、樋上、桐沢、佐藤、太田は11時頃からロザの裏山へ順応に行く。急斜面のジグザグ道を登ると上はなだらかな放牧地になっている。4,400m位まで登って引き返す。天気が良ければ見える筈のターラ・リは雲の中であった。(我々は結局、この山の姿を一度も見ることなくチベットを去ることになる。)

夜、5人で再び隊長の見舞に行き、明日からの事について指示と激励を受ける。(記：太田)

ターラ・リBC経由、新BCへ

〔打拉日BCへ〕

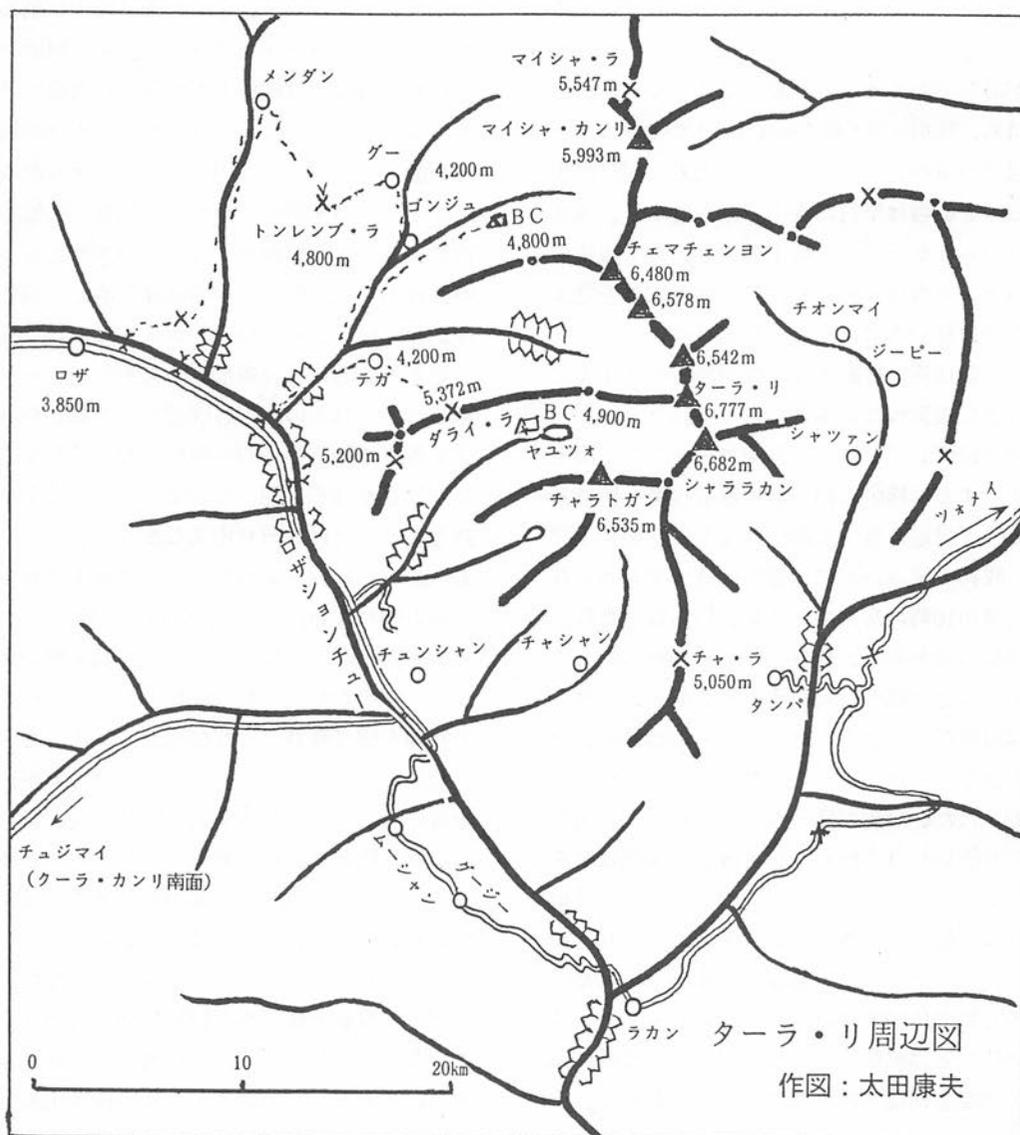
8月7日

8時半からの朝食に合せて7時45分にベッドから抜け出す。今日は一昨日決めた達来拉を越えて打拉日とその南に続く下拉拉崗の間に喰い込む谷の最奥カルカ付近に設ける事にしたBCに向けての出発の日。このルートは目標の山が若尼峰から打拉日に変更が確定した時に最も有力なものとして取り上げていた。しかし達来拉の高度が高いため越えるのが大変に思われ、これまで2日間かけて直接このBC予定地に入るルートや更には東面まで足を伸ばして別のルートを偵察して来たものの結局良いルートが見つからず、最後に残したこ

のルートの偵察も洛扎雄曲に架かる橋が車で渡れなかった為に十分に偵察出来ずに終わってしまっていたもの。その後洛扎に帰って連絡官に情報を収集して貰うと馬なら手配出来るとの事で、今日は馬16頭に洛扎雄曲に架かる橋から2日かけてBCまで隊荷を運んで貰う初日である。

午前9時、前日隊荷の積み込みを終えたトラックを先頭に隊員はランクル2台に分乗して招待所を出発、洛扎雄曲沿いの車道を下流へと走る。50分で近くに拿后集落にある目的の左岸支流出合いに到着、本流に架かる橋の手前の広地に車を止めて隊荷を降ろす。約束の馬16頭が程なくやって来たので、隊荷の積み込みは野沢井登攀隊長や成天亮連絡官らに任せ、10時に太田隊員、続いて10分後には佐藤隊員、桐沢隊員と共に樋上も橋を渡って支流沿いの右岸の道を上流へと辿る。途中、上流から下って来る多くの地元民と出会うが、みんな驚く程に愛想が良い。我々日本人と会うのが初めてだからであろうか。2時間程で途中の得嘎集落に因んで得嘎曲と呼ばれる左岸からの支流の出合う地点で道が分岐し、我々の進むのは支流沿いの道である。ところが待って呉れていた先行の太田隊員が、ここには橋が架かっていないから本流を渡渉しなければならぬと言ってパンツ一枚になって太腿近い深さの早い流れを渡り出す。それではと我々3人もそれに続いてズボンを脱いで渡渉したが、水が冷たく裸足だから流石に痺れてしまった。無線交信では馬の出発は11時との事。

この後暫く得嘎曲沿いに橋を3度渡り返して左岸に移った所で得嘎集落に向かっての九十九折れの急坂を喘登、集落には13時に到着する。ここで一泊するものと思って待っていると程なく到着した馬工頭は幕地は未だ先だと言って、何やら今日中にBCまで行くのではと思える雲行きだが、何はともあれ重い腰を上げて歩行を再開。集落から最初は流れを左下に見ながらの広い平坦路で気持ち良く進む。しかし次第に傾斜が強くなって来ると足は徐々に前に出なくなる。何度もの休憩は有るものの余り体力の回復には役立たず、歩みを再開する度に先行者に離されて苦しい登りが続く。そのきつい登りが2時間程で終わると道が漸く流れの方へと降りて、広い河原の中を進み出す。傾



斜が無くなったので楽になる筈なのだが朝からの長い行軍で身体は思うように動かず、到頭その途中でへたへたと岩に座り込んでしまう始末。ラサで高所順応登山をして来たと言っても、その後大した動きをしておらず、こんなに長く歩くのは久しぶり。時間は既に16時近く、そろそろ幕地を決めて貰わねばと息を整えながら先行する野沢井登攀隊長と太田隊員の元気な姿を羨ましく見ていると、突然の如くその2人が前進を止めて付近をあちこち動き回る姿が目に入る。もしや程良い幕地を見つけたかと、足許をふらつかせながらその場に辿り着く。すると案の定、ここを今夜のピバーク地にしたいとの提案。願っても無い事で一も二

もなく賛同、丁度左岸から支流の出合う草地の広い平坦地で、支流には綺麗な水も流れていて水場にも不自由しない。

隊荷の到着するのを待って早速幕場設営、先ずは馬から降ろしたプラパールを一ヶ所に集め、隊員全員が入る大テントを一張り。更にテントの傍にプロパンボンベとコンロを並べて料理場作り。この最中に降り出した雨は翌朝まで降ったり止んだりが続く、時には激しく降ったりして登山活動初日から天気が悪いのが気掛かり。モンスーンに入っているこの時期、毎日の好天を期待する方が無理なのかも知れない。連絡官と謝運転手にはテント一つを使って貰い、馬工たちにはプラパール

を囲いにブルーシートを上にかけて夜を凌いで貰う。

陽が落ちてからとなった食事はコンビーフ、魚の缶詰め、味噌汁等で軽く済ます。しかしアルコールは当然の事のように缶ビールが出る。明日の事も有るので就寝は早目。夜中は割合暖かく、寒さは気にならなかったが、馬工の放した馬や放牧のヤクがテントの周りをうろついて時々眠りを覚まされたのは私一人ではなかったようだ。

8日、早朝は霧。移動中は小雨が降ったり止んだり、BC設営後には本降りになる。

7時に起床してビスケットやコーヒーで空腹を満たす。すぐに移動の為の幕撤収作業を始めるが、馬工が付近に放って置いた馬を探すのに手間取り、隊荷の積み込みの目途が何時までもつかない。何時か10時になってしまい、仕方なく野沢井登攀隊長に後を頼み、残りの隊員と連絡官の五人で一足先に達来拉へと向かう。馬が揃い、出発したのは11時だったよう。達来拉への道は最初、それ程の登りでも無く、ピクニックでもしているような趣。ただ、小雨が降ったり止んだり、雨具を着たり脱いだりと煩わしい。隊員の中には傘をさして歩みを続ける者もいる。やがて前方に屏風のような尾根筋が大きな広がりを見せると峠への登りで、ここから一気に急登が始まる。それだけでも苦しいのに5400m近い高度へ向かっての登りで、気持ちとは裏腹に足の方は思うように前に出ない。何度も何度も休みながらの登行が続く。その内、馬の一団が登り始めるのが見えて来るし、別の方向から姿を見せた謝運転手などは半ば駆け足気味なものには呆れてしまう。

峠にはやっとの思いで12時半に登り着き、一息入れながら下方の見下ろせる所で馬の登って来るのを眺め待つ。踏跡程度のこの登り、流石の馬たちも苦しそうで、時々よろけて危なっかしい場面も二度三度。そして嫌な予感が程なく的中、斜面の陰で姿の見えなかった馬工頭が先頭で引く馬が突然の如く峠すぐ下の出っ張りから頭を覗かせ、後もう少しと思った瞬間、馬体が斜め下へと横倒しになるような形で崩れた。馬工頭が必死で手綱を引っ張っていたが、そのままズルズルと視界から消えてしまったので倒れたのか転がり落ちたの

かは定かではないが、その直後に背中に積んでいた2つのプラパールがゴロンゴロンと斜面を転がり始め、最後には跳ね上がりながら物凄いスピードになったと思ったらパッと弾けて中身が周りに飛び散る。そしてその中身もプラパールがつけたスピードを引き継いでバラバラになって転がり行く。遠くて何が転がり行くのか殆ど分らないが、途中で穴が開いて中の液体を激しく噴き出しながら回転して行くペットボトルだけははっきりと見える。ああ〜貴重なウィスキーが、それも2本もだ。それらの物が谷底近くまで転がり落ちて止まるまで幾らの時間も掛からなかっただろう。しかし我々はその間、その落ちて行く様を唯々茫然と見守るだけで何も出来なかった。と言うよりも一瞬何が起ったのか理解出来ず我を忘れていたのかも知れない。ふと気が付くと中腹にいた野沢井登攀隊長が下りながら散乱した品を拾い集め出しているのが見え、我々峠にいたメンバーも急いで斜面を駆け降り、これに加わる。どうやら隊長の個装が殆どでバラバラになってはいるが損傷は少ない感じ。他には医薬品が目立つが、これも壊れる様な物が無く殆ど無傷。ただアルコール類はペットボトルに入った2本のウィスキーは全て大地に吸い取られ、僅かに残っていたワインを野沢井登攀隊長がペットボトルに回収しただけ。ところがそんな我々隊員を尻目に斜面の途中にいた馬工たちは馬を引き連れて下の緩斜面へと降りてしまう。それどころか滑落した馬の持ち主らしき男が口角泡を飛ばして馬工頭に何か喚き、それを聞いた馬工頭が連絡官に激しく詰め寄る有様だ。彼も自分がその馬を引いていただけに、責任を感じてなのか、これまでの人懐っこくてにこやかな顔からは想像出来ない程に血相が変わっている。積み荷が重た過ぎるからだとか抗議し、その為に起った事故だから怪我をした馬の弁償をしろと要求している様で、それでは我々の隊荷の損害はどうして呉れるのだと言いたくなる。しかし彼の抗議は強硬で、このままではBC行きを拒否して引き上げかねない様子。しかもここは我々の主張が通る日本では無くチベットと言う異国の地である。そんな事になれば登山を中止せざるを得なくなる。そんな不安な思いで事の成り行きを見守っていた

▼ターラ・リBC



ら、馬についてはどう言う結論になったのかは分からないが、連絡官が上手く纏めて呉れ、隊荷の一部をその場に残し、馬の負担を軽くして一旦峠へと運び上げ、残した隊荷は何頭かの馬で再度運び上げる事で一件着落。

それやこれやで再度峠に登り着いてから全ての隊荷が運び上げられるまでの間、霧雨が降る中寒さに震えながら長時間待たされるし、その後下りにかかって湖が上流に有る流れを左下に見ながらの山腹トラバースに入ってから慎重になった馬工たちの動きが遅く、左岸からの枝谷が二つに分れる地点の広い草地の平坦な台地に着いた時には18時になっていた。そこがBCと言う事で高度は4850mとのことだ。

すぐさまBC設営を開始、メス TENT を含め隊員及び中国側スタッフ用のテント4つとキッチンテントを張り終える。そのキッチンテントは後で明日帰ると言う馬工たちにの時に提供。後は取り敢えず必要な隊荷を取り出しての整理で作業を終了、漸く疲れを癒す時間が持てる。勿論キジ場作りは担当の佐藤隊員一番の仕事で立派な洋式のものが出来上がっていた。

夜はラーメンを食べながらのBC開き。加えて今日は野沢井登攀隊長の誕生日で、その為に持参したと言っても良いワインは大半無くなっていたが残った分を分け合って祝う。色々あった一日だったが、漸く明日から登山が始まると心をときめかせながら10時半に心地よい眠りに就く。

9日、早朝は霧で、その後も雨が降ったり止んだり天気は相変わらず良く無い。

8時に起床し、味噌汁と缶詰で朝食。10時になっ

て馬工たちが馬を引き連れて帰って行ったので雨の止んでいる合間を見て今後の登山活動に合わせての隊荷整理。メス TENT 傍には無線用のアンテナを立て、受信状態のチェックもする。このアンテナ立ては佐藤隊員の提案・担当だったが、他にも昨日の便座付きの洋式トイレの設置に今日は早速ゴミ焼却作業と積極的に元気の活動ぶりが目立つ。他のメンバーも動きが良くして医療担当係としては嬉しい限り。これも全員の高所順応が順調な証拠だろう。13時から昼食を焼き飯と味噌汁で済ませ、午後から上部キャンプ用の食料準備作業。その後は夕食までフリータイム。

夕食はスイトン。アルコールはビール、ウイスキー、ワインと豊富だがメンバーの酒量は上がりず。この席で野沢井登攀隊長から今後の登頂に向けてのタクティクスの発表が有り、いよいよ明日はC1へ登り、登山活動が始まるとの緊張からだろうか、10時就寝。

〔無念の打拉日撤退〕

10日、小雨後曇り、夕方頃から再び雨。

7時に起き出し、毎日の事ながら先に起きて野沢井登攀隊長と太田隊員の2人が支度して呉れたスイトンで朝食。何もせずに目を覚ますと食事を頂けるのだから有難い事だが、2人には毎日毎日の事で申し訳ない。

9時にC1予定地に向けて出発準備を済ませるが、雨が降っているのはそれも出来ず暫く待機。30分程で雨が止んだので連絡官や謝運転手と握手を交わしてBCを出発。BCのすぐ横下、目指す本流右岸に流れ込む枝谷に沿って続く放牧で出来たと思われるトレースを上流へと辿る。野沢井登攀隊長と太田隊員のペースは早く、後の3人はどんどん離される。水の流れは程なく途切れ、後は窪地になった草地の中を緩やかに登って行くが、右手の本流とを分ける波打つ小尾根がモレーンのような感じだし本流と殆ど平行状態なので本流の分水、即ちインゼル状になっているように思える妙な地形。30分程で窪地の突き当たりがそのモレーン状の小尾根と接するように思える地点に先行した2人がいるのが見える。休んでいるのかと思いつつながら近づくと一向に先へ進む気配が無い。それでは我々の着くのを待って呉れているのかもと思つ

てしまう。ところが2人のいる地点へ登り着いた途端、目の前に今まで見た事の無い物凄い景観が広がり、事態はそんな甘い事では無いと思ひ知る。眼下には幾つもの氷塊の浮き島を漂わせ下流に向かって細まったくの字形の大きな湖（亜伏錯＝ヤユツォ）が濃紺乳緑色の水を満々と湛えて広がり、周囲を囲む高いモレーン末端が流れを堰き止めるかの如くに出口を狭め、その部分だけが切れ込み落ちているので丸で巨大なダム湖の様相を呈している。それよりも我々を驚かせたのは湖の向こうの氷河がその幅一杯のまま直接湖面へ落ち込み、先端を次第に細めながら恰も突き出した半島の如く一直線に湖面上を走って、我々の立つ高台へと押し寄せていた事である。この景観、見るだけなら何時までも見飽きる事の無い美しさで、感嘆の声をもらしてしまう程に素晴らしいものだが、この状態から見ると嘗ては湖面に押し出された氷河の左手の湖面も嘗て右岸に密着した氷河であったのが近年の地球の温暖化現象で融けてしまったのであろうし、更に遡ればモレーンの状態からも出口に向かう右手の湖面も氷河だったのは疑いなく、今後一層氷河が後退して水量が増えれば何時かモレーンを突き破って下流に大洪水をもたらす危険が有り、これも美しさものが持つ刺なのであろうか。話を元に戻すと、湖面の氷河上はズタズタで数え切れないクレバスが走り、この高台からはブラインドになっていて確認出来ないが仮に岸と繋がっていたとしても、とても中央突破を計る気にはなれない。更に右岸の湖面際も嘗ての氷河によってそぎ落とされたザレ場やガレ場となった急斜面で、ここをトラバースするには多くのザイルをフィックスする必要が生じ、相当の時間を取られるのは明らか。それではと左右の尾根に目を転じたが、これもギャップが幾つも続く岩峰の連なりで、時間的に無理が有る。

その場で野沢井登攀隊長を中心に1時間以上あれこれ考え、相談しただろう。そこで出た結論は打拉日への登頂断念、そして新しい山への転進である。ここでルート探しやルート工作に時間を取られ、時間切れして登頂を諦めるよりも今なら他の山へ転進しても時間的には間に合うと言う判断だ。その山とは打拉日から北に延びる尾根上の哲

馬真勇（チェマチェンヨン＝6480.4m）で、万が一の場合にはと事前の偵察の時から野沢井登攀隊長がルートも含めて提案していたもの。そう決まればと引き返し、BCに12時帰着。早速、その旨を連絡官に伝え、転身の為の馬の手配を依頼する。連絡官も流石ですぐさま下流のカルカへ交渉に向かい、馬工4人と馬16頭の手配を済ませて帰って来た。ただすぐと言う訳には行かないのは当然で、馬工は12日の夕方になって来て一泊し、翌13日朝から移動と言う事である。

次への転身が決まり、ラーメンでの昼食を終えた後はフリータイム。私は湖の写真撮影を兼ねて右岸の小尾根沿いに上流への散策。帰りはBC北側の山腹高みを辿って下る。証拠になる写真が撮られていれば良いが……。

7時から夕食。今夜は麻婆春雨が肴。すぐにウィスキーを飲み始めたが、明日が休みになって遅くまで四方山話に花を咲かせてしまった。

11日、朝から霧雨で一日中降ったり止んだり。

8時の起床。お茶漬けでの朝食の後、雨の止んでいる間を見計らって新しいBC予定地への移動に備えての隊荷梱包作業。残りは明日と明後日の出発前にする事として約半分程の梱包で終了。その後を自由時間にしたので退屈な日となり、楽しみは食事と夜のアルコールぐらい。天気が悪い精も有って景色は楽しめないし近くを探索する気にもなれず、昼食を高野豆腐と餅の汁物で済ませてから夕食の時間が来るのが待ち遠しかった事。その反動でも無いが夜は日本酒とビールを痛飲、寝りに就いた時には12時を過ぎていた。

12日、曇り後小雨が降ったり止んだりの一日。

昨日から連絡官と謝運転手の2人が夢中になって野鳥を捕まえようとしていた罠に獲物が掛かったと大騒ぎしている声に8時に眠りを破られ、テントから顔を出しては見たものの、他のメンバーが誰も起きていないようなので再びシュラフに潜り込んだら12時まで寝込んでしまった。流石に昨夜の深酒が響いたらしく、起きてからも頭が冴えない。

朝昼兼用の焼き飯での食事を終えて、昨日の残りの隊荷梱包作業。後は昨日同様寝るまでフリータイム。

▼ヤユ・ツォに流れ込むヤユ氷河の偉容



4時になって連絡官たちが捕まえて作ったスープが出来たと言うので御相伴に預かる。調味料が無い精か胡椒味の強い単純な味つけの上に骨が多くて食べ辛いのが久々の肉気だけに思わずむしゃぶってしまった。この頃になって周囲のスノーピークを覆っていた雲が風に流され、幾つかのピークが初めて頭を見せ始め、シャッターチャンスとばかりカメラを構えるが、一つ見えても次のピークが見え出す時には再び雲に隠れて、結局は全体的な山の連なりを捉えられずに終わる。

6時を過ぎて馬工4人が馬16頭(子馬一頭付)を連れて到着し、テントサイトは一気な賑わい。しかし明日は新しいBCへの移動日だし昨晚の深酒もあってスイトンでの夕食を終えた後は早めの9時に就寝。この前同様、馬工4人にはキッチンテントを時に提供。

〔新BCへの新たな旅立ち〕

13日、小雨後次第に回復し青空も見られる。

7時半に起床。外は霧に包まれ余り天気は良くない。水団(スイトン)と雑炊での朝食を済ませてからBC撤収作業にかかり隊荷の梱包を手際よく短時間で終了。ところが又も馬工たちが夜間放した馬数頭が中々見つからず、その間小雨が時々降る寒い中で長々と待つ羽目に。それでも一向に見つからないので連絡官のアドバイスを受けて野沢井登攀隊長と謝運転手を残し、他のメンバーは連絡官と一緒に新しいBC目指して10時に先発。往路を辿って達来拉に向かう途中から幾分天気は回復、二度と会うことも無いだろう周りの山々との惜別に心が動く。これに心を奪われ注意が緩慢になった訳では無いが、うっかり達来拉への登り

口を見失って谷を大きく下り過ぎ、後から追い付いた連絡官の指摘で慌てて引き返す大失敗。その為、一人先に登り着いていた太田隊員を1時間も待たせてしまい、峠には12時着。定時無線交信によれば我々が出発してからも馬を見つけるのに手間取り、隊荷を積み終えて野沢井登攀隊長たちが出発したのは13時との事。

達来拉からは下り一辺倒でペースが上がる。途中のカルカでは持ち主が昨夜馬工たちと一緒にBCへやって来ていたので顔見知りのグルもどきの小屋(テントでは無く掛小屋風)に招じられて茶を呼ばれながら大休止。

このカルカからの下りで又も道を取り違えるミスが出る。本来流れに近づくように下らねばならないのに平行に道を辿り、途中で気が付いたものの、何れ得喫集落へ下るものと高を括っていたら集落が見下ろせる所まで来ると道は集落へ流れ落ちていく谷の遥か上流の方へと続いている。已む無く下に有るであろう正規の道に向って斜面を下降する事にしたが、これが何とも酷いガレの急斜面。滑落や落石の危険が有って足許に気をつけねばならないし頭上も気掛かり。冷や汗を流しながら必死に下り、漸く往路の道へと下り着くが、思わぬきついアルバイトに足先と膝を痛め、後は足を引き摺りながらの辛い思いをして得喫集落には5時10分帰着。

早速我々の着いたのを知った村人が続々と集まって来てメンバーは一躍村の人気者。写真を撮ったり食べ物を交換したりで賑やかな事。お互い言葉は殆ど通じないがボディランゲージで愉快な一時となる。往路にも幕地にと考えた広場(民家に隣接して集落最も高台に有り、周りはスクエアに石囲いされ、地面も四角い石が敷きつめてある)を一応今夜の幕地にしたいと連絡官に伝え、村の責任者の承諾を取って貰う。

それから待つこと1時間余り、野沢井登攀隊長と謝運転手が隊荷より一足先に6時半帰着し、それから遅れる事30分で隊荷も到着。ところが、ここでは馬を放しておく草地が無いし他に良い場所が有ると言う馬工頭の指示に従ってすぐさま移動を再開、集落下の得喫曲へと下り、少し下流に下った左岸傍の川原へと案内される。そこは集落から

流れに降りた地点と本流出合いとの中間付近。辿り帰る道の途次だから不都合な事は無いものの崩壊を起しそうな崖下で危なっかしい気もしたが他に適当な場所も無いようなので幕地とする。7時30分。

早速、テント張り、続いてすぐに食事の準備とテキパキとこなし、空腹を満たした後は明日の移動に備えて何時もより早目の9時に就寝。シュラフに潜り込む前に明日隊長を迎えに行く謝運転手に洛扎を出発してから今日までの活動報告書を託す。16日の隊長復帰まで後3日残っているが、これまで色々とはプニングが続いただけに取り敢えず隊長代行役を無事終了されたようで一安心して眠りに付ける。

14日 昨日の天気は尾を引いているのか朝の内は曇り。しかしその後は時間の経過と共に回復。

8時の起床。朝食の後すぐに幕地の撤収作業。その最中、馬工頭と一緒に来ていた女房殿が作ったと言うチベット女性が巻く腰紐を買って呉れと言うので土産物にする。ラサに戻れば売っているものだが、それより安いようだ。

今朝は馬工たちもこれまで2度の失敗からか放っていた馬の呼び集めがスムーズで程なく積み荷作業を開始。連絡官が本流の渡渉に馬2頭をすぐ後から向わせると言うので、野沢井登攀隊長に後を任せ、残りの隊員4名は9時45分に一足先に幕地出発。15分で本流出合い。本流の水量は連日の雨模様で流石に多く、白い波頭を立てて岩を噛む濁流は荒々しく往路のようにズボンを脱いで渡渉するのを躊躇させられる。しかし太田隊員はさっさとパンツ一枚になって渡ってしまう。佐藤隊員も渡るつもりようだったがすぐに馬が来る事だからと待って貰う。ところが待てど暮らせど一向に馬は姿を現わさない。対岸で待つ太田隊員もイライラを募らせている様子なので、偵察がてら先に上流への道を辿って貰う事にする。本流に出てから1時間、11時になって漸く馬の姿が見えたと思ったら、何と後には野沢井登攀隊長は勿論、隊荷を積んだ馬全部も続いている。何はともあれ馬に乗せられ無事に渡渉。ここで隊長を迎えに洛扎へ行く謝運転手と馬工頭は下流へと向かい、我々は太田隊員の後を追って上流への道を辿り、先ずはこ

▼ターラ・リBCから稜線上に山が姿を見せた



の本流奥の集落を目指す。集落が有るのだから辿る道は先々のものだが、途中に架かる橋は一つだけで、流れを何度も渡らねばならず、深い所では馬工に背負って貰っての渡渉を繰り返す。話を聞いて集まったらしい村の子供も数人混じって賑やかな行軍が続く。中に土産を買った女性馬工の子供に違いない女の子がいて、2人一緒に楽しそうに歩いている姿が微笑ましい。親が子を想い、子が親を慕うのは民族に関係なく人間なら当然の事で、願わくは何処かの国のその心の薄れた風潮に歯止めがかかって欲しいものだ。

やがて川沿いにチンコウ麦を植えた畑がポツポツ出て来て集落近しを感じると程なく右岸側遠くに集落の佇いが見えて来る。遠目にも思っていた以上に大きな集落のようだ。それは集落が間近に迫った所に有った発電所の存在を見ても明らか。その処魯集落には13時に到着。集落の入口に着いた途端、大勢の村人に取り囲まれ、ここでも大歓迎を受ける。誰に聞いたのか私が薬を持っているのを知った老婆から目薬が欲しいとせがまれたりして戸惑わされる。これだけの集落ならチャンが有るだろうと連絡官に頼んだら直に持って来て呉れ、久々の懐かしい味で喉を潤す。暫くゆっくりしたいところだが、今日はBCを建設せねばならないので程々に神輿を上げて先へと進む。集落から上流への道は有るには有るが、進む程に悪くなって踏み跡程度へと変わって行く。やがて右岸から大きな支流の出合いが高台になっていて、馬工頭が、「ここはどうか」との仕草を示すが、物足りない感じだったので更に足を延ばすと程なく左岸側に広い草地の平坦地が現われる。野沢井登攀隊

長がその先の右岸側に渡渉して偵察に向かったが、馬工頭はこれ以上の前進は駄目だとの主張のようなので、登攀隊長の帰って来るのを待って、ここをBCにする事に決める（後の登山活動で分った事だが、この先流れはゴルジュが続き、BC適地が無かったから、流石馬工頭の主張は付近の地形を熟知しての事だったに違いない）。高度は約4800mで狙うピークとの高度差は1700m程だから先々だし、時間も15時とBC設営や隊荷整理を済ませた後で今日の疲れを癒す時間も充分に有る。早速馬の積み荷を降ろし、先ずはキッチンテントと隊員用テントを張り終える。4張りしたテントの割りあては桐沢隊員と佐藤隊員、私と太田隊員とし、野沢井登攀隊長には隊長復帰まで一人でメステントで過ごして貰う事になる。当然最後の一つは中国スタッフの連絡官と謝運転手。後ろの隊荷整理が終わってから連絡官に肉は要るかと思われ、何とかなるだろうと羊肉一頭分を頼み、序でにチャンも持って来て貰うように依頼する。両方とも16日に届くとの事。

馬工たちは荷物を降ろした後も我々の作業を手伝って呉れたりしていたが、作業が終わってもノンビリしていて一向に帰る様子が無く、今夜はここに泊まるつもりなのかと思っていたら7時前になって帰り支度。どうやら暗くなる頃に村へ帰るつもりで時間潰しをしていたらしい。

一段落ついて最後は夕餉の仕度。ところが着いた時には澄んでいた流れの水は夕方になると濁り出して飲料は勿論、洗い物をするにも適さない程になり、今後の水の確保が一寸気掛かり。

夜は再度のBC開き。連絡官を交えてビールで乾杯。食べ物は麻婆春雨の他に何種類もの缶詰めと数日ぶりのご馳走。ビールの後はウィスキーで締め括り、新BC最初の夜は10時の就寝で幕を閉



じる。

(記：樋上嘉秀)

ターラ・リ初登頂

〔廻行活動？ BC～C2〕

若尼峰からの転身、そしてターラ・リ主峰の東面、西面の偵察、そして断念によって我々は益々「流浪の民」登山隊となってしまった。連絡官はターラ・リ旅遊隊（旅行）と呼んでいたが、そして最後に最悪の場合を想定して狙っていた、「哲馬真勇（チェマチェンヨン）6,480m」への転身を決めた。ターラ・リ山群は南北に伸びる山脈であるが6座の6,000m峰を有している。その山脈の最北に位置する6,000m峰がこの山である。ロシア製1/10万の地図によると、アプローチとなる処曲（チュ・チュ）という谷沿いに道が記載されており、主稜線上のターラという峠を経て東面に至るルートとなっている。又このルートを採用し、ターラ付近にアタック・キャンプを設ければ、その北に位置する、「麦沙崗日（マイシャ・カンリ）5,993m」も登れるというおまけ付きである。

こうして、我々が処曲の沢中にBCを移転したのは8月13日、日本を出て既に17日も経過していた。

8月15日 本来ならばBC到着後、1日はBC整理を兼ねてレストとするのだが、登山期間が残り少なくなってきた為、A隊（野沢井、太田）はC1へのルート偵察を行なう事とする。B隊（樋上、桐沢、佐藤）はBCレスト。

ルートの処曲は相変わらずゴルジュの溪相。まるで深い井戸の中の様である。ガレ場のへつり、何回もの徒渉を繰り返しながらの登山で、気分はすっかり沢登り。我々2人はプラブーを長靴に、ピッケルを雨傘に変え、この沢登りを楽しんだ。日本で沢登りの会を作って楽しんでいる樋上さんにはこたえられないルートだったのではないだろうか。

読図のプロ太田氏が1/10万の地図を片手にナビゲート、本流を忠実に詰める。1:1の大きな支流を分ける二股を過ぎ、「そのうち滝が出てきたりして」と話していたら本当に大きな滝（F1、2段25m）が出現した！沢登りのセオリーでは「巻く場合は小さく巻く」であるが、ゴルジュ両

岸上部は尾根からゆるやかな草原となっていていそう
な為、左岸の大きなガレ場を登り大きく高巻いた。
予想通り上部はゆるやかな草原となっていた。そ
れにしても地図に記載されている道はBCより先
は全く見当たらなかった。

沢は玉砂利の河原を持つゆるやかな溪相に変わ
る。我々のBCは荷物を運ぶ馬の関係上ゴルジュ
の中に設けたが、この辺りをBCに出来れば最高
のテント場となったのだが…。沢には下りず高巻
いた所から草原状のルートを通らばトラバース気味に沢
筋に進む。この辺り、大きな岩がゴロゴロしてい
る。その中の鷲の形をした岩などは「鷲の巣岩」
などと命名しルートファイディングには随分と役
立った。

しばらくすると沢は三俣に分れる。左俣などは
100mクラスの見事な大滝（F3、100m）を掛け
ている。名前を付ければ「くの字 100mの大滝」
といったところか。中俣は上部で左俣の谷に吸収
され、右俣は深い谷となっている。実は私達は、
この日右俣を本流と間違え、この沢を詰めC1適
地を探したのであった。この沢は途中伏流となり
水が消えてしまう為、キャンプ地としては不適な
為、取りあえず行動を打ち切り荷物をデポしBC
へと下山した。

8月16日 全員でC1への荷揚げ

先日から太田さんは地図を片手に首を傾げてい
る。どうも先日の最後の三俣が間違っている様だ。
再び地図と地形を一つ一つ確認しながら登る。や
はり最後の三俣で間違った様だ。

さて本流となる左俣の大滝はとても直登は不可
能な為、中俣の沢を詰め、途中から左俣との間の
尾根を越え大きく高巻くルートをとる。大滝上へ
出ると本流は広い谷となって主稜線に続いていた。
しかし沢筋は深くえぐられゴルジュとなって続い
ている。この広い谷の両岸は平坦な草原状でキャ
ンプ地としては最高な場所であるが、問題は水の
確保である。深くえぐられた沢までの水汲みは少々
大変である。しばらく思索していると、僅かに流
れる小沢を発見出来、そこをC1（5,400m）と
する。対岸になんと一頭の馬を発見！何故こんな
所に…どこからやってきたのだろうか？。テント
を張り終え、後続のB隊との無線交信を行なって

▼BCからチュ・チュを廻行する



いると、ロザの入院生活からBCへ無事復帰して
きた山森隊長からの無線が飛び込んできた。荷物
をデポしいそいでBCへと駆け下った。久しぶり
に全員そろった事で夜遅くまで宴会は続いた。

8月17日 BCレスト

久しぶりに晴れ間がのぞいた。この時期、陽が
出ると暑い。昼食は好評だったラサで購入した冷
やしうどん。又、タイミング良くゴンジュ村のツェ
リン・ドルジェがチャン（チンコウ麦で作ったド
ブロック、10ℓ30元）を運んできた。彼は我々のキャ
ラバン中の馬方だがこの後遠征最後まで親しく交
流する事となった。

8月18日 A隊（BC～C1 ←C2）、B隊
（BC～C1～BC）

C1に到着してみると、前回流れていた小沢が
なんと涸れていた。結局、往復20分、本流までの
水汲みを強いられる事となってしまった。

私達A隊は更にC2までのルート偵察へと出掛
けた。所々ケルンを積みながらの行動である。50
個位作成したであろうか。

沢は次第に源頭の溪相となってきた。日本での
沢登りであれば源頭に入るともうすぐ終了という
事で心踊る瞬間であるが、ヒマラヤではこれから
が本番なのである。雲の間から主稜線が薄っすら
と望む事が出来る。その稜線からは小規模ながら
氷河が掛かっている。その氷河には入らず、左岸
のモレーンに入る。ガレたモレーンを登ると、氷
河湖（池）の脇に平坦なキャンプ適地を見つけこ
こをC2（5,800m）とする。

結局我々はここC2まで長靴と傘で登ってしまっ
た事となってしまった。帰路は激しいミゾレの降

▼C2からマイシャ・ラ方面をみる



中ケルンを追加しながらC1へ帰幕した。このミゾレは夜雪と変わり翌朝まで降り続け、C1も真っ白な雪景色と変わった。

8月19日 A隊(C1～C2～C1)、B隊(BCレスト)

昨日からの雪は一向に止む気配もなく降り続けている。やっと11時過ぎ雪から雨に変わった為、傘をさし、C2への荷揚げを開始。C2に到着すると天候が僅かに回復、目指す「哲馬真勇」の全容がガスの中、薄っすらと姿を現した。テントを張り荷物をデポし早々とC2を後にする。C1に戻ると再び激しいミゾレ、この天候の悪さには本当に厭になる。

8月20日 A隊(C1～BC)、B隊(BC～C1)

朝の定時交信が通じず、もしや昨夜の悪天でBCは鉄砲水にやられたかと心配したが、単に忘れていたらしく一安心(数日前、支流の沢が濁流となった為心配だった)。我々A隊はBCへ下山する。

8月21日 A隊(BCレスト) B隊(C1～C2～C1)

BCにはものすごい数の放牧された山羊がやってきた。若い山羊使いは我々外国人が大変珍しいらしく、山羊をほったらかして我々のテントから離れない。その後連日彼らは訪問してきた。

8月22日 A(BCレスト) B(C1～BC)

アタック体制が整い、久しぶりに全員がBCに集結。いよいよ頂上アタック開始。

頂上へ！一次アタック

8月23日 A隊(BC～C1) B隊(BCレスト)

皆と握手を交わし、頂上アタックに向けてBCを出発する。C1に到着すると数頭のアイベックスの訪問を受けた。夏のこの時期、沢山の野性動物を見る事が出来た。

8月24日 A隊(C1～C2) B隊(BCレスト)

C2へ移動。C2到着後、時間も早い事も有り明日のアタックに備え、途中までのルート偵察を行なう。今遠征初めてのプラブー、アイゼン、での行動で、意気揚々と出発した。が、氷河に入ると非常に雪が腐って歩きづらく、罵詈雑言を吐きながら登る事となった。クレバスも小さなのが所々あるが雪面が柔らかく、どこがクレバスなのかも解りづらい。適当な所で打ち切りC2へと戻る。

C2に到着すると同時に雷を伴った激しい降雪。夜になるとこの雪も止み、僅かだが久しぶりに星を見る事が出来た。明日の好天を期待して眠りについた。

8月25日 A隊(C2～Top～C2) B隊(BC～C1)

5時起床(北京時間、実際は3時の感覚か)。心配していた天候もそれ程悪くない。BCとの定時交信を済ませ、7時25分出発。氷河に入りロープを結び、前日のトレースをたどり登り始める。モンスーン期のこの時期、午後から翌朝まで天候が悪い事が多かったが、今日は珍しく比較的好天に恵まれた。ガスの中から時折太陽が顔を出し、久しぶりの好天に気分も盛り上がる。しかしそれも登り始めて2時間ほどであっという間に西側から湧き出してくるガスに覆われ視界が利かなくなってしまった。このターラ・リ山群は西側から天候が崩れてくるようだ。先日のトレースを過ぎると雪面は相変わらず締まっておらず深く重い雪のラッセルを強いられた。視界の利かない中ただ上を目指し黙々と登り続ける。雪面は次第に傾斜を増すが、軟雪なので滑落しても安心である。ガスの中、ぼんやりと両サイドからの稜線が近づいてくるのが解る。随分と登ったのだろうか？ホワイトアウトの為どこを登っているかも全く解らない。後ろを登る太田さんに方向修正をしてもらい、黙々と高みを目指す。

拷問の様なラッセルを続けていると稜線上へと辿りついた様だ。稜の反対側は東面の壁となって

スッパリと切れ落ちている。ガスの中、回りの地形を観察していると大きな雪庇の上に乗っている予感がして慌てて戻る。そういえば今遠征の合宿でも雪庇を踏み抜き危なく命を落としそうになった事を思い出した。稜線上の先に岩場が見える。岩場があるという事は雪庇の危険が無いだろうと、そこを目指し大きく稜下をトラバース気味に登る。岩場に到着してC2を出てから初めての小休止をとる。哲馬真勇を越えて無名峰6,557mまで足を伸ばす予定なのでここまで休まずぶっ飛ばして登ってしまい太田さんには随分悪い事をしてしまった。

アタックの為オープンしている無線機はC2を出て今だ沈黙を保っている。

ここから頂上は雪のドーム状となっており、雪の大斜面となっている。

稜線は頂上ドームからギャップとなり、小規模だがクレバス帯となっている。クレバス帯は切れ落ちている東面を避け、西面側から巻き、頂上への雪の大斜面へと取付く。この最後の雪面の登りは気温が上がってきた事も有り、雪は更に深く、重い。下駄の様にまとわり着く雪のラッセルに随分と苦労させられた。なんとか大雪面を登りきると頂稜へ飛び出した。雪庇に注意しながら頂稜を進み、頂上を目指す。ガスで視界は利かないが稜は広い雪原となり、ゆったりと南に向かって下っている。高度計も中国地図の指す6,480mにはほぼ近い数値を指している。一番高そうな雪面を頂上として(13時15分着)竹竿を立てた。

頂上はガスで全く視界が利かず、楽しみにしていたクーラ・カンリ、ブータン国境の山々も見ることが出来なかった。なによりもターラ・リ主峰を望む事が出来なかったのが残念でならない。又BCとの無線藻通じずなんとも味気のない登頂となった。

計画では更にその南に聳える無名峰(6,577m)まで足を伸ばす予定だったが、天候、雪質の悪さなどを考慮しここで行動を打ち切る事にした。

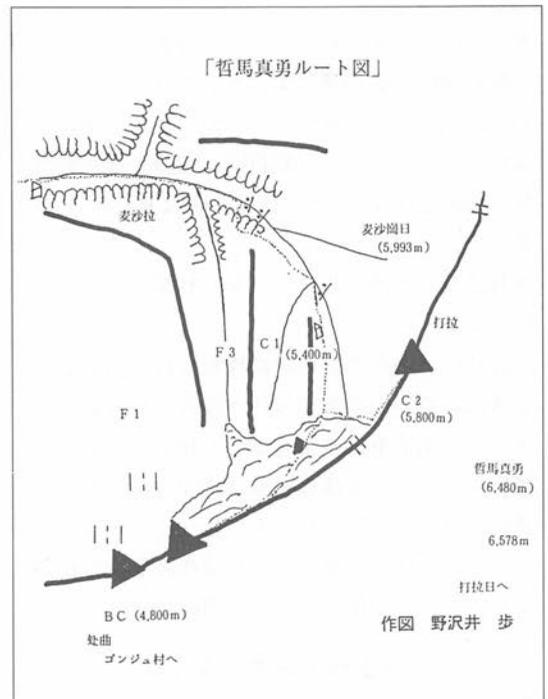
大雪面の下降を始めると、やっとBCとの無線交信が出来、登頂の報告をする。

予想通り気温の上がった午後の雪質は更に悪くなり、アイゼンに着く下駄の様なダンゴを落としながらの下降で大変であった。

▼チェマチェンヨン頂上の太田隊員



▲チェマチョンヨン全容



15時、無事C2に到着。ここでやっとガスの中、「哲馬真勇」の全容が姿を現した。明日はマイシャ・カンリへのアタックを控えていた為、あまり終わったという安堵感も無く眠りに就いた。

(記：野沢井 歩)

2次アタックそしてBCへ

8月25日 野沢井、太田(A隊)はこの日1次アタック、そして我々2次アタック隊(B隊)樋上、桐沢、佐藤の3名はC1入りの予定である。このところ雨が多く目の前の川は水嵩が増している。C1までは兩岸切り立ったこの狭い谷合の川を何回も右へ左へと渡らなければならない。BC出発12時高曇り。急流の渡渉を繰り返して13時20分大滝の下。途中で水晶の原石を見つけた。大きな石英の中に水晶が沢山埋まっていた。大滝から沢を外れガレ場の急登、それを登り切ると大岩“鷹の巣”そして広く大きな谷間が開ける。周囲は赤茶けた脆そうな岩山-5,600m~700mの山々だが氷河はない。なるべく獲得した高度を下げないようにガレた斜面をトラバースし(小さな花々に目を止めながら)対岸の東側を沢沿いに再び急登して午後3時C1(5,400m)到着、小雨。周囲の山はうすすらと雪。A隊はこの日初登頂に成功した。

8月26日 昨夜も雨。朝食は餅入りラーメン。小雨の中C2へ向け9時出発。A隊が作ったケルン、赤旗を辿る。ガレ場を1時間ほど登るとコル状となりここで初めて氷河末端らしきものと対面。小さいながら氷河を左に見ながらガレ尾根を行く。小ピークを幾つか越えてC2(5,800m)着は11時半。雨が上がったらガスに包まれる。一時薄日もさし目指す哲馬真勇(6,480m)の大きなム状の山容も見えたがほんの一時で中々写真も撮れない。ガス、雨、霰、雪と天候の変転極まりない。“君たちの日頃の行いが悪いせいではないか”と無線機の声。

A隊は今日C2より尾根伝いに麦沙崗日(5,993m)に初登頂しC1泊り。明日私たちのアタック中そこで待機することになった。

8月27日 7時45分C2出発。15分程ガレ場を歩いて雪原に出、ここでザイルとアイゼンをつける。一昨日A隊のトレース及び赤旗に導かれ大雪原の

中央を登る。氷河らしいクレバスやアイスフォール、氷などは見当たらない。トレースがあるにも拘わらず足元は柔らかく昨日の新雪もあって完全に足をとられる。トップを次々交代しながらラッセルをするが傾斜がゆるくなかなか高度を稼げない。今日も天気の変化が目まぐるしく一時青空も見えたがまたすぐにガス、雨、雪の繰り返し。午後3時ごろドームを登りきる。ルートはここから広い尾根を南下し1時間ほど進んだところでこれが頂上かと思われる小ピーク直下約6,400mに達した。時計は午後4時を指している。BCの隊長との定時交信の結果、天候も吹雪模様となってきたのでここで撤退することになった。帰りは赤旗を回収しながら雪に足を取られ転びながらようやく午後7時にC2へ戻った。山の大きさとパワーの不足を感じた。

8月28日 アタックチャンスは1回のみで今日は撤収。小雪が散らつく中テントをたたみパッキングする。哲馬真勇の写真はついに1枚も撮れないでしまった。はちきれそうなザックをかついで9時40分C2出発。11時A隊が待つC1へ。そこで登攀隊長と相談した結果私たちB隊はいったんBCに戻り休養してから30、31日の2日かけて麦沙崗日やることになった。そこでシュラフや登攀用具等をC1にデポしBCに向かった。

(記：佐藤邦彦)

マイシャ・カンリ初(?)登頂

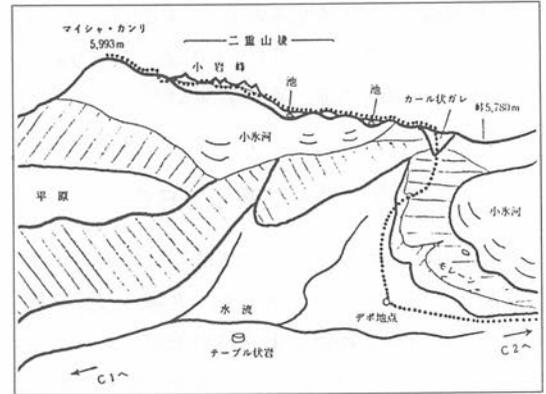
8月26日 霧雨・雪・曇 今日Bパーティー(樋上、桐沢、佐藤)が明日のチェマチェンヨン峰アタックに備えてC2に上る予定である。入れかわりに野沢井、太田はC2からC1に降りるのだが、余裕があれば、チェマチェンヨンの北にのびる稜線にあってC1へ下るルートの途中から取り付けるマイシャ・カンリ(5,993m)に登る、という事になっていた。昨日のチェマチェンヨンへのアタックで重い雪と野沢井氏のハイ・ペースに苦しめられた私はC2帰着時にはかなり疲労しており、寝る前には頭痛も出たので、マイシャ・カンリへ行くのは多分無理だろうと思っていた。ところが今朝は頭痛がきれいに消えており、疲れも大分取れている感じがした。天気は相変らず良

くないが、大荒れでなければ問題無いだろう。

9時40分、C2を出て霧雨の中C1へのルートを下る。2人とも長靴と傘である。個装の他にフィックスロープ等、不要になった装備も入ったザックがずっしりと重い。視界のきく日に見ておいたところでは、チュ・チュー源頭の小さな氷河の舌端に沿ってモレーン上を東に回り込み、カール状のガレ谷からチェマチュンヨンとマイシャ・カンリとを結ぶ南北方向の稜線に出て、それを北に辿ればよさそうであった。予定通り氷河沿いに行こうとしたが、途中に谷が深く切れ込んでるように見えたので一旦モレーンの下の平坦な所まで降りる。ここに不要な装備をデポして身軽になり、目指す稜線の方に少し歩いてから再びモレーンに上った後、カール状のガレを登って稜線に出る。このあたりは砂礫の上に雪が薄く着いているだけなので長靴の方が歩きやすいのだが、私の長靴の片方は下部が破れていて雪が入ってしまい、ここでプラブーツに履き替える。高度は5,800m。マイシャ・カンリまで高度差200mしか無いが距離は2km程ある。

視界の悪い中、アップダウンを繰り返す。紛らわしい枝尾根は無い。少し行くと左手に雪原(氷河?)が現われ、その手前には小さな氷河湖(池)があった。その先でアイゼンを着けアンザイレンして野沢井トップで雪面に踏み込む。このあたりは二重山稜のようになっていて、2つ目の池を過ぎて右(東側)の稜線を登って行くとガスの中から次々に小さな岩峰が現われ、全て左の雪面を巻く。時々降雪が強くなるが風は弱い。幾つ目かの小岩峰の左方向に少し雪庇のある高みが現われ、そこが頂上のように見えたが、高度計がちょっと低く出ているなど思いながら登ってみると、まだ先がある。前方にぼんやりと巨大なスノードームが姿を現わした。と思ったが、これはガスのいたずらで、登るにつれて大した高度差ではない事がわかった。左から回り込むように登って行った野沢井氏が止まり確保の体勢をとる。12時45分、私が登り着く。北側は下りになっている。下から見た山の形を考え合わせても頂上に間違い無い。握手。BCの山森隊長、C2に着いた樋上副隊長と無線交信。

▼マイシャ・カンリルート図



「地元の人が簡単に登って来れるような所ではないので、初登頂と考えて良いと思います。」と、野沢井氏。私も恐らくそのとおりでだろうと思うが、北にも南にも2km余りの所に峠があり、標高が標高だけに、誰か物好きな人が過去この頂上に達した可能性が絶対に無いとは言えないような気もする。それにしても、天気良ければターラ・リの山群はもとよりクーラ・カンリや更に先の山々まで見える筈のこの頂上も、今は白一色で何も見えないのが残念である。どこの写真か分からないだろうな、と言いながら一応写真を撮り合う。その時、ジジジという微かな音が聞こえて髪の毛のあたりに違和感を覚え、慌ててしゃがみ込む。雷が怖い。急いで下山にかかるが、往路の稜線を戻らねばならないので、なかなか高度が下がらない。池を過ぎるあたりから幾分視界が良くなり、雷も遠のいたようで一安心。途中から長靴に替えてデポ地点へ下る。

ここからは重荷に耐えながらケルンを辿り、15時C1着。そのまま高度差50~60mの谷底まで水汲みに行ってくれる野沢井氏に感謝しつつテントに転がり込む。(記:太田康夫)

9月2日 晴/曇 BC撤収

8/15~9/1 18日間すごした河原上でのBCを撤収し、A隊の輝やかなしい初登頂を後に、帰路につく。BC撤収8:00~9:00終了。9:15頃よりポーター、ポツポツ姿を見せ10:50には、男性8人女性20人が集合する。女性が多いのにはビックリする。プラパール20個、ボンベ4個、シート3巻等々に分担し、早や出発かと思いきや、焚き火を起し、湯を沸かしての、のんびりした昼食。

小生もバター茶をごちそうになるが、そして13:15出発。溪流ぞいに下る。所々に渡渉あり、2回オンブしてもらい助かる。ゴンジュ集落着17:35着。この間8回の休憩、約30分歩き、10分前後の休憩か、川の渡渉、急な登りをものともせず、30kg前後の荷を帯ヒモ1つで担ぎ上げるパワーには脱帽です。夜はゴンジュ村長等々と一杯会、楽しい歌と共に、ひさしぶりのステキな星空と三日月を眺めつつ、深い寝りに入る。

9月3日 晴 ゴンジュ停滞

目覚めと共に、ステキな星空の朝を迎える。早速屋上に、テント類を干す。そして無事下山を祝い、村の寺へ参拝する。入山路土砂崩れの為、通行不可で、これより迂回路、峠越をして、ロザとの事で、ポーター等々の準備日となる。午後少年2人の案内で裏山のカルトへ登る。眺め抜群、周囲にステキな岩塔有り、クライミングに心踊る。又チャンを求めて家を訪問し、お茶を御馳走になる。そしてのんびりと休養する。因みに、ゴンジュ村4,290m、戸数78、人口366人、男161人、女205人との事。

9月4日 晴 ゴンジュ～デンプウ村

ポーター、男6人、女24人、馬1頭、早朝より集り9:00出発する。川端を上流に向かって歩き出し、早速渡渉3回、2回オンブしてもらい、又1回は馬に乗せてもらい助かる。やがて集落を右手にして登りとなり、峠着12時。これより平原を右へトラバースして13時昼食。4グループに別れての焚き火食、我れもバター茶と、ツェンバを御馳走になる。昼食後もさらに高原を右にトラバースする。白き神々の座は、曇とガスの中で姿なし、誠に残念。やがて、溪谷が、眼下に、急坂を下り高原トレッキング終了。デンプウ着17時15分。夕食等は村長さん自らの手料理を御馳走になる。うまし。

9月5日 曇/晴 デンプウ～ロザ

昨日と同様のメンバーで9:20出発。本流沿に下降する。平坦地、彼等の足速し、ゴザ着10:50大休止後、再び下降し13:00、2組に別れての昼食。これより先道路崩壊の為、右手の山レンブラ峠越でロザへ、14:15出発、急登の為彼等もフーフーアアタだが、女性のパワー強し。峠に達する

と眼下に集落が見え、一挙に集落へ、これより平坦地を歩きロザへ。下山は天気にも恵れ、高原トレッキングもこれにて終了です。ポーターロザ着18:00。

9月6日 曇 ロザ滞在

装備、食料等の整理をし、一日のんびりと休養する。

9月7日 曇 ロザ～ラサ

隊長、登攀隊長を残し、ジープ1台にて、6:45出発する。集落3～4ヶ所過ぎると周辺の山の石が丸石→角石→平石→そして最後にガレ石と変化するのは興味深かった。道路崩壊で、沢道となり一度車を降りて歩く。又6～7ヶ所工事用テント有復旧作業中、峠着9:07(5,254m)10:15頃、湖中央あたりで、補助官のシエーさん、ジープ2台と出会う。12:15頃、我がジープドロにはまり込み、動けず、運良くシエーさん逆もどり牽引してもらうラッカーズ町13:00昼食、シエーさんと別れる。浪卡子峠、15:35着、展望楽しむが、白き神々の座見えず峠を下りラサへと、舗装道路に出てまもなく17:20今度はパンク。一度あることは2度ある。3度無き事を祈り無事18時ホテル着。ところが「ヒマラヤホテル」でなく、別の所逆もどりする。スパーンティーク隊長と鈴木氏に会い夕食を共にする。

9月8日 晴 ラサ滞在

午前中、町見物とおみやげさがしに出かける。12時隊長到着、夜は全員揃ったので祝賀会を開く。

9月9日 晴 ラサ～成都～北京

午前中、荷物送る為、副隊長と共に郵便局へ、そしていよいよ帰国、12:35送迎バスにて飛行場へ。ラサ発15:47、成都着17:40ほぼ満員、成都発18:50、北京着21:00、送迎バスにてホテル着22:00。最後の夕食を楽しむ。

9月10日 晴 北京～帰国

アット言う間にすぎた45日間、大変お世話になりました。謝謝。(記: 桐沢輝治)

(日本ヒマラヤ協会: ターラ・リ登山隊2000年)
隊長: 山森欣一(東京・56才) 副隊長: 樋上嘉秀(大阪・56才) 登攀隊長: 野沢井歩(神奈川・35才) 隊員: 桐沢輝治(神奈川・61才) 佐藤邦彦(福島・57才) 太田康夫(広島・47才)

地域ニュース

《ブータン》

ザ・カップの上映

神秘の国ブータンから初めての映画がやってきた！題名は「ザ・カップ・夢のアンテナ」。監督のケンツェ・ノルブは本国ブータンでは最も有名な高僧。プロデューサーは「ラストエンペラー」や北野武監督の「BROTHER」のジェレミー・トーマス。

ゆったりと流れる時間、どこまでも青く広がる空、雲、透明な空気、少年たちの素朴な目の輝き、異空間での出来事のようなファンタジックな物語。ヒマラヤの大自然を背景に描かれる少年たちの友情と、それを見つめる大人たちの慈愛にみちまなざしが心に響き、ナチュラルな感動が胸に伝わってくる。

ヒマラヤ山麓の僧院で、ウゲンたち小坊主は、掃除の時間もコーラの空き缶をボール代わりにサッカーに熱中している。ある日のこと、少年ニマとバルディングが僧院にやってきた。ウゲンはそんな新入りも巻き込んで、友だちと真夜中に僧院を脱げ出した。

1999年ブータン／オーストラリア共同製作
渋谷Bunkamura ル・シネマで正月上映
3479-9264

トピックス

第22回インド・ヒマラヤ会議

HAJ主催恒例のインド・ヒマラヤ会議が下記のとおり開催される。参加希望の方はHAJ事務局にTEL/FAXで申し込み下さい。

記

1. 日時：2001年1月28日（日）9時～17時
2. 場所：豊島区立勤労福祉会館
豊島区西池袋2-37-4 ☎3980-3131
池袋駅西口徒歩10分、南口7分
3. 参加費：3千円

4. 内容：インド・ヒマラヤ2000年

インド・ヒマラヤ登山手続きの概要
登山隊報告 その他

Books

エリック・シプトン 山岳探検家
波瀾の生涯

登山・探検の分野で活躍した高名なイギリスのエリック・シプトンの生涯を新しい資料を駆使して紹介した書である。著者のピーター・スティールは、1971年に行われたエヴェレスト南壁の国際隊（隊長：N.ディーレンファース。日本から植村直己と伊藤礼造が参加。インドのH.バフグナが死亡。）に参加経験を持つイギリスの医師である。著者はこの隊のことを「エベレスト南壁（時事通信社刊、丹部節雄訳）」として出版している。

シプトンの一生を取り上げているので、学校生活からアフリカ、ヒマラヤ、カラコルム、行政官、イギリス、パタゴニア、ガラパゴス、アラスカ等の活躍が万遍なく収録されているが、一つずつの活動については報告書等があるので割愛している。

しかし、本書にはこれまで知られていなかったシプトンの書簡などからの事実が書かれていて、新鮮さを感じるし、あらためてシプトンの偉大さを思わざるを得ない。

訳者の倉知敬氏はかつてシプトンの「未踏の山河」をも訳出しているが、本書のあとがきで「いまや旧著が皆絶版になっているから、若い世代の読者にとっても、一時代の登山史を垣間見る絶好の読物ではないか。」と記した。

若き岳人たちに本書を是非読んでもらいたい。そして未知の地域に興味をもってもらいたいものである。（記：山森）

山と溪谷社 2000年7月25日刊 2800円＋税

MENTHOSA・6443

大阪教職員山の会が2000年夏、インド・ヒマラヤのラホール山群はメントーサに派遣した登山隊の報告書。小畑和人隊長はこのところこの会のヒマラヤ登山の中心となって活躍しているが、本書の中で「今回、私自身は許可の取得などの海外折

衝やタクティクス、国内での登山訓練など、具体的な仕事の担当から手を引きました。これは一人でも多くの人にヒマラヤ遠征に必要な準備作業の大変さや具体的な仕事を知ってもらい、今後は自分で遠征をマネジメントできる人を育てるためでした。」と述べている。このことは大切なことだと思う。

現在のヒマラヤ登山の世界を見ると、商業公募登山が若年層にまで流行ってしまって、高所遠征に満足している様に思える。ロングスタッフやシブトンになれとは言わないが、せめて登山を取り巻く全体像を知った上で「登山」を実行してもらいたいものである。後続する登山者のためにも報告書には、テイクイン、テイクアウトの実情を報告してもらいたい。

(記：山森)

B5判 45頁 (連絡先) 〒639-0211 奈良県北葛城郡上牧町滝川台1-22-9 小畑和人

上海・チベット一万キロ

足利工業大学と中国の浙江工業大学が共同でチ

ベット高地を中心にしてクリーンエネルギー利用に関する調査・研究の報告書。韓国、インド、ネパールも加えた国際的な活動となった。

本隊は、上海～杭州～重慶～西安～敦煌～成都～タングラ峠～ラサの9000kmを走破したが、クリーンの代表である「電気自動車」で走行できたのは200kmであった。一部の隊員はカイルスを一周した。

(記：山森)

A判 141頁 (カラー16頁) 2000年11月5日刊
2500円 (連絡先) 〒326-0808 栃木県足利市本城
3-3905-7-703 沖允人

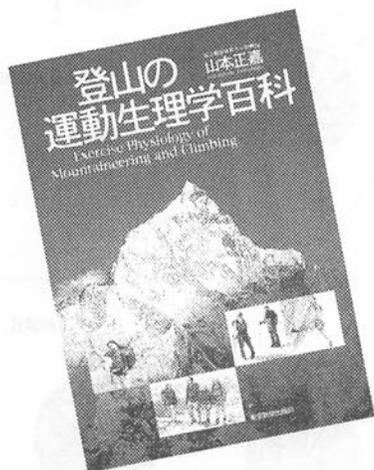
東京集会のお知らせ

日 時	12月25日 (月) 午後7時～
内 容	忘年会
場 所	HA Jルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

「身体の仕組みを知って、安全登山を!!」

登山の運動生理学百科

山本正嘉 著 (国立鹿屋体育大学助教授)



「登山で疲れる原因は何か」「中高年や女性登山者でも快適に登るためには?」「適切なトレーニングABC」「あなたにもできる高所登山」など登山全般を網羅。

初級者からベテランまで幅広い登山者を対象に、登山と健康、疲労、中高年者・女性の山歩き、トレーニング法を詳述。クライミング、高所登山も科学的データをもとに解説。著者は、ヒマラヤをはじめとする高所登山家であると同時に、スポーツ生理学の専門家。

●A5判・並製 ●価格：本体2000円+税

東京新聞出版局 (中日新聞 東京本社) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎03-3740-2674 (直) FAX03-3458-0689

登山4団体共催「ヒマラヤ登山者アンケート調査」結果

実務担当者会議の共通見解まとまる

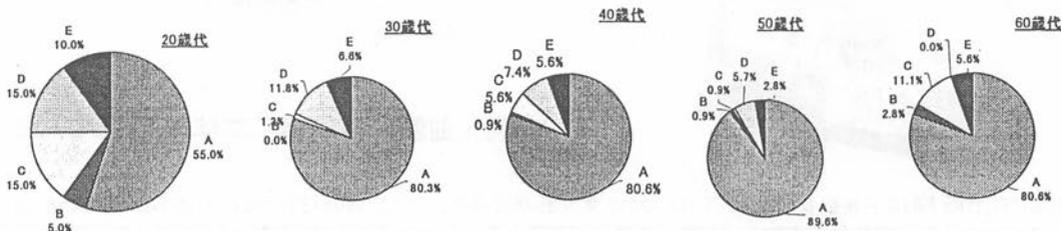
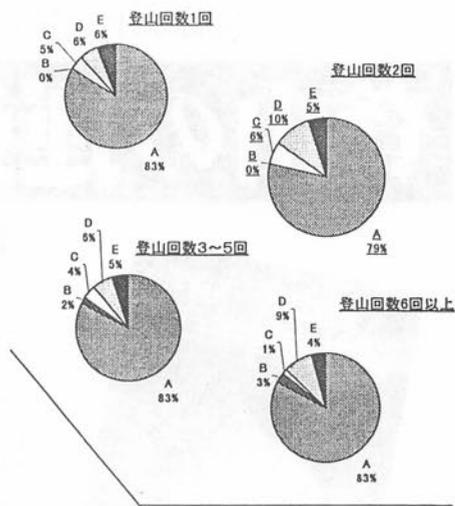
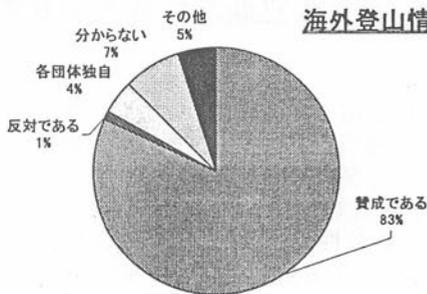
登山4団体（日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会）が実施した標題のアンケート調査結果については「ヒマラヤ346号」にて報告したが、10月27日に開催された実務担当者会議において、実務担当者の共通見解が下記のとおりまとまり、主要新聞13社、通信社2社及び山岳雑誌（山と溪谷／岳人）に通知し、紙（誌）上にての広報を依頼した。

「ヒマラヤ登山者アンケート調査」結果についての実務担当者共通見解

- 1) アンケートの回答率が50%を切った事は、1980年代初頭から台頭したヒマラヤ登山の大衆化が定着したことを窺わせ、今後の対策はこのことを念頭におかなければならない。
- 2) 回答者の8割以上が、登山団体が共同して「海外登山情報センター（仮称）」を設立することに賛成している現実を踏まえて、平成10年3月に4団体が合意した「海外登山情報センター設立準備委員会」の活動を軌道にのせるべく、4団体は積極的に取り組んで行く。
- 3) 登山と環境保護は共生できるものである。この点から「テイクイン、テイクアウト」運動は主要な柱の一つであるが、登山者に必ずしも定着しないようなので、より分かりやすい啓蒙活動を模索して行く。
- 4) 遭難時に対応するための保険・共済については、回答者の4人の内3人までが、「組織に関係なく加入できる共済制度」を望んでいる。未組織登山者が増加している現状も視野に入れてどのようなことが可能なのか協議する時期に来ている。〔アンケート結果をグラフで表示すれば下記のとおりである。〕

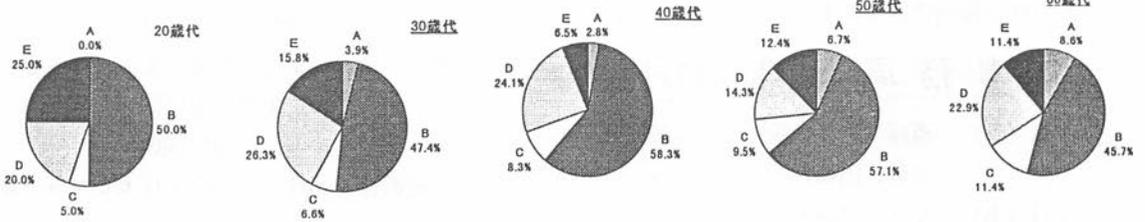
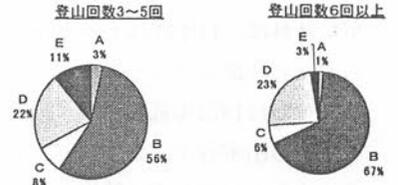
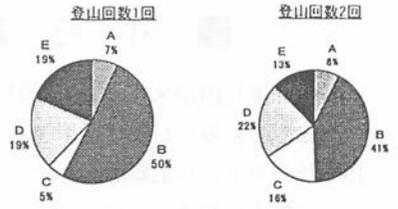
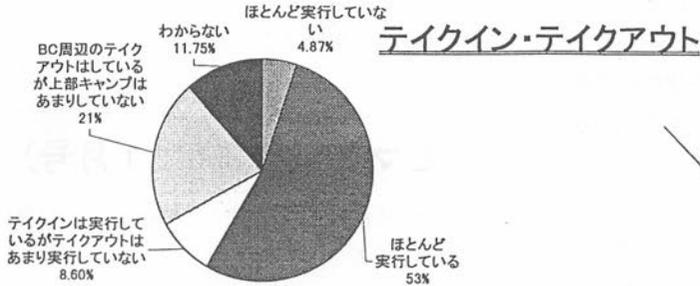
問4: あなたはヒマラヤを中心とした海外登山情報を一元的にまとめ、情報を求める登山者やマスコミなどに有料で提供する機構「海外登山情報センター（仮称）」を、登山団体が共同で設立する事についてどのように思われますか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	
A 賛成である	11	61	87	95	29	5	288	82.05%
B 反対である	1	0	1	1	1	0	4	1.14%
C 各団体独自	3	1	6	1	4	0	15	4.27%
D 分からない	3	9	8	6	0	0	28	7.41%
E その他	2	5	6	3	2	0	18	5.13%
	20	76	108	108	36	5	351	



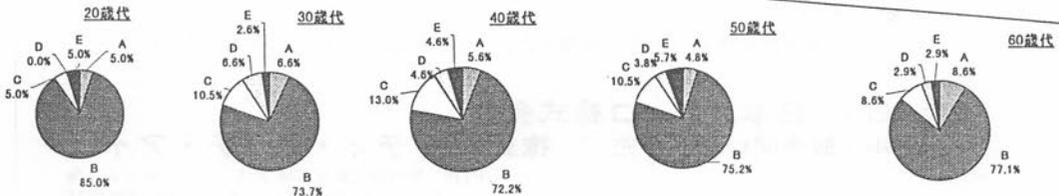
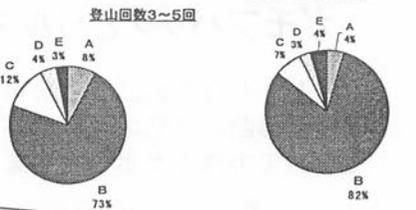
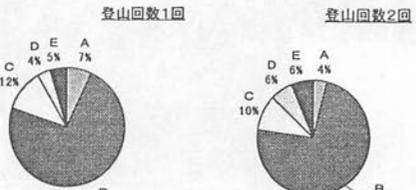
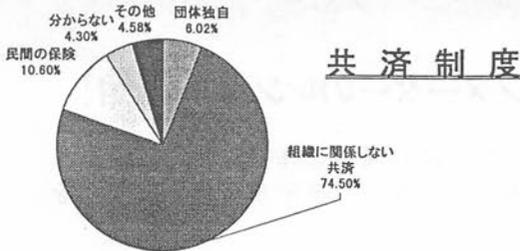
問8: あなたはヒマラヤ登山を実施する時に、テイクイン、テイクアウト運動についての程度行っていますか。

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	
A	0	3	3	7	3	1	17	4.87%
B	10	36	63	60	16	2	187	53.58%
C	1	5	9	10	4	1	30	8.60%
D	4	20	26	15	8	1	74	21.20%
E	5	12	7	13	4	0	41	11.75%
	20	76	108	105	35	5	349	



問9: あなたは国内登山やヒマラヤ登山を実践する時に、遭難対策用の保険や共済制度についてどのようにお考えですか？

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計	
A	1	5	6	5	3	1	21	6.02%
B	17	56	78	79	27	3	260	74.50%
C	1	8	14	11	3	0	37	10.60%
D	0	5	5	4	1	0	15	4.30%
E	1	2	5	6	1	1	16	4.58%
	20	76	108	105	35	5	349	



■ 寸 感 ■

ヒマラヤ登山が文化として花開いた20世紀も終わろうとしている。日本の戦後のヒマラヤ登山は、1952年のマナスル偵察隊から始まっているが、戦前の立教大学隊のナンダ・コットを入れると頂度2000年で50年の歴史となる。しかし、不幸な戦争がなければ、日本隊はもっと早い時期にヒマラヤの山々で活躍した筈である。

横有恒は1924年暮頃、霞ヶ浦海軍航空隊に副長兼教頭の山本五十六を訪ねて、ヒマラヤ登山の参考にするため高々度の酸素マスクを見せてもらった。或いは、ディレーフルトにカンチェンジュンガ登山隊（スイス）に誘われたなどの事実がある。

これらも含めた歴史をまとめて残すことも我々の世代の義務であると考え。 (山森)

事務局日誌 (11月)

- 4日(土) 斎藤一男氏出版記念会(於平河町、遠藤、山森)
9日(木) ヒマラヤ349号発送

- 11日(土) 法政大学Ⅱ部山岳部創立50周年記念祝賀会(於市ヶ谷、山森)
13日(月) 4団体「登山者アンケート」調査結果を報道15社と山溪、岳人へ発送
2001年登山隊参加意向伺い発送
14日(火) 中国登山隊調査用紙発送
21日(火) 西藏大学代表団歓迎会(於霞ヶ関、山森)
27日(月) 東京集会(21名)

ヒマラヤ No.350 (1月号)

平成12年12月10日印刷 13年1月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

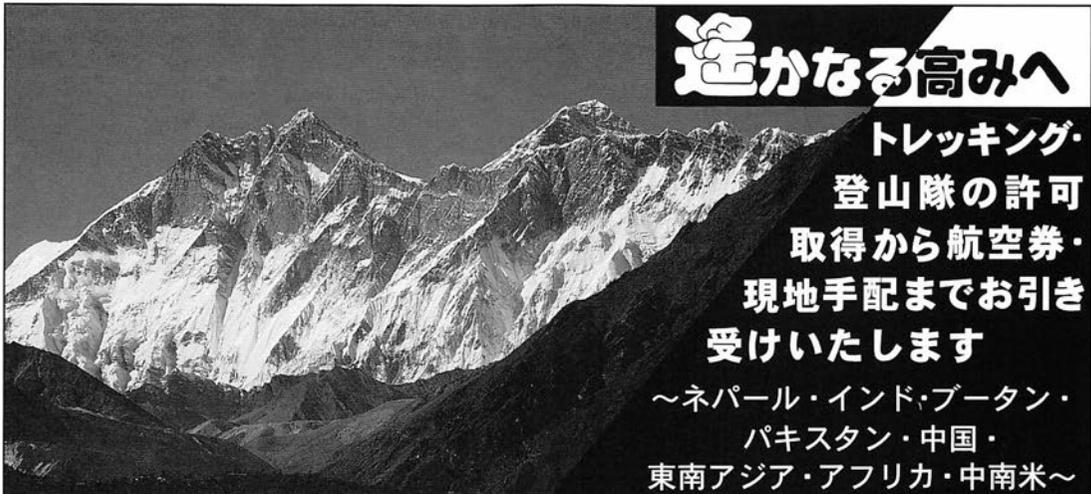


マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号



遙かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391代 FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391代 FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING/SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに！



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384代 FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060代 FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004